

書評・紹介

末木文美士著

『鎌倉仏教形成論—思想史の立場から』

三木 彰 円

このたび、末木文美士氏により、『鎌倉仏教形成論』（法藏館）が出版された。その内容を目次により掲げると次の通りである。

序章 鎌倉仏教への視座（鎌倉仏教論の課題／平安仏教から鎌倉仏教へ／院政期仏教の再検討／本書の構成）

I 顕と密

第一章 顕密体制論の再検討（一）—黒田俊雄説をめぐって（問題点／鎌倉仏教論の系譜／思想史、宗教史の方法論／顕密体制論／仏教革新運動論／いかにして批判的でありうるか）

第二章 顕密体制論の再検討（二）—平雅行著『日本中世の社会と仏教』をめぐって（問題点／方法論をめぐって／異端派をめぐって／『選択集』解釈をめぐって／その他の問題点）

第三章 顕と密（問題点／顕密関係論の形成と展開／遼・道殿『顕密円通成仏心要集』とその射影）

II 法然とその周辺

第一章 初期の思想形成（語録の問題点／『往生要集』釈書／その他の文献）

第二章 『三部経大意』（本書の概観／至誠心積をめぐって／その他の諸問題）

第三章 新宗の開創とその論理（新仏教をめぐる議論／新宗への批判／開宗の論理）

第四章 寛容と非寛容—法然門下の諸行観（問題点／天台における寛容と非寛容／法然における非寛容／法然門下における寛容と非寛容）

III 明恵とその周辺

第一章 明恵の思想展開（生涯／思想解釈の問題点／仏光観の実践と理論）

第二章 明恵の釈迦信仰（建久九年の明恵／『随意別願文』の釈迦信仰／明恵の釈迦信仰に関する補足）

第三章 明恵と光明真言（光明真言の展開／明恵における光明真言／光明真言の理論／光明真言土砂加持／結び）

IV 本覚思想の形成

第一章 本覚思想における心の原理（本覚思想研究の現状／『本無生死偈』をめぐって／『本無生死偈』における心の原理／心の原理をめぐるいくつかの問題／「翻刻」本無生死偈（金沢文庫本））

第二章 本覚思想と浄土教—『妙行心要集』の場合（念仏と観心／本書の概観／本書の思想（一）—白毫観—／本

書思想(二)——浄土教思想の展開——

第三章 偽書の形成——伝南岳三部書と伝忠尋釈書(問題点) / 伝南岳三部書 / 伝忠尋釈書

第四章 (批判仏教)の再検討(批判仏教の経緯 / 批判仏教の主張とそれに対する反応 / 批判仏教に関する私の関与 / 批判仏教に対する現在の私見)

結章 仏教の民衆化をめぐる(鎌倉仏教は民衆的か / 法然、親鸞の民衆観 / もう一つの民衆観)

本書は、著者が一九七〇年代に発表された二篇の論文(Ⅱ第一・二章)及び書き下ろし五篇を含む近年の論文を中心として構成されたものである。それぞれの論考の要点については、著者自身が序章第四節に「本書の構成」を設けているので、それを参照していただくことが何よりなのであるが、「鎌倉仏教」について、法然と明恵に焦点を絞りながら、その二人の思想を考えていく上で、基本的に踏まえなければならない思想的背景とこれまでの研究史に対して、資料に基づきつつ系統的かつ多岐の視点から考察がなされている。

著者は本書を編むにあたって、

本書の基本的な方法は、仏教学の立場から教理思想文献を読み込み、解釈して、それを思想史の流れの中に位置づけようというものである。従来、仏教研究は仏教学・宗学・歴史学のそれぞれが縄張りを作って棲み分け、仏教学は主としてインド・中国の仏教を扱い、日本仏教の研究は、宗学と歴史学委ねられてきた。しかし、それでは思想文献

を宗派的偏見なしに適切に処理することはできない。その棲み分け体制を打ち壊し、日本の仏教思想の流れをきちんと思想的に跡づけたというのが、一貫して私の求めたことである。その作業がなされて、はじめて思想をより広い社会の諸動向とのダイナミックな連関の中に置くことができるであろう。(はじめに)

とその方法論とそれが意図するところについて明確に述べるが、その点において、著者の言うところの「各分野の棲み分けと相互干渉」による「硬直状態」(八頁)の前でしばしば当惑せざるを得ない筆者にとつては、各論のポイントと問題点、さらには明恵の思想の全体像の把握という点において、大きな示唆を与えてくれるものである。

さて、「鎌倉仏教」を我々がとらえていこうとする時、その中軸として考えていかなければならない存在とは、法然という仏教者である。「鎌倉仏教」は、法然を嚆矢とし、法然を軸として展開された仏教であると言えようが、日頃その法然について親鸞を通して学ぶ者として、「Ⅱ法然とその周辺」という著者の論考から思うところを少しく述べてみたい。

著者は法然の思想形成の過程に対して、Ⅱ第一章・第二章において考察を加え、さらにⅡ第三章「新宗の開創とその論理」において、法然における「浄土宗」という「新宗」の成立について、「選択本願念仏集」全体の構成へ注目しながら考察されている。著者は『選択集』(建久九年、一一九八)が、後に『興福寺奏状』(元久二年、一二〇五)の提示する「新宗」創

設の「教判・伝灯・勅許」という三条件のうち、「教判・伝灯」について提示しているということを指摘した上で、『選択集』の教判について取り上げているが、その中で『選択集』に対して、

『選択集』全体がある意味で教判論の壮大な体系をなしている。(二六八頁)

という位置づけをし、

その教判論は二重性を持っている。(二七六頁)と述べている。その「二重性」については、

第一に、第一章における人師道練による聖道・浄土二門判であり、その限りでは聖道門が完全に否定されるのかどうか、はっきりしない。それに対して第四章以下における釈迦の選択、特に第二章に典型的に見られるものは、釈迦がその経典において念仏のみに優越性を与え、他の諸教・諸行を否定したとするものである。第一、第二章で人師の釈迦を通して主張された捨・閉・闍・抛の偏執性は、第二章において完成されるのである。(二七七頁)

と位置づけた上で、法然のこの教判が「果たして十分に人を納得させるものであろうか」(二七七頁)という疑義を提示している。

著者によって、この見解が導かれてくる基点にあることは、著者の『選択集』第一、二章に対する位置づけ、特に第一教判章に対する位置づけであると思われる。著者は、『選択集』第一、二章について、その依拠とされているのが「道練・善導と

いう人師の釈」であることに力点を見た上で、

第一、二章は我々衆生の側から次第に諸宗・諸行から称名一行へと、限定に限定を加えて追いつめていく過程であり、その意味で衆生の側の選択ということが出来る。(二七〇頁)

と言う。その第一章(教相章)に対しては、「まさに立教の教判を提示する箇所であり、それが道練に拠っているのは論拠として弱いように見える」(二七一頁)が、『選択集』の教判の体系が持つ「二重性」という点で、

第一章の曖昧さは、この章があくまでも導入的な意味を持つことによるのであり、また、少しでも外との摩擦を避けたいという意図もあったと思われる。(二七一頁)と述べる。

しかし、『選択集』全体の中で、教判を主題とするこの一章は、著者が言うように「導的な意味を持つ」ということだけで済みますことができる章であるのだろうか。著者も述べておられるように、『選択集』においては、その第一章(教相章)・第二章(二行章)を通して、「南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先(本)」と法然が提起する「選択本願念仏」たる称名念仏一行に、その視点が限定されていくわけであるが、むしろその限定を必然する基点となるところに位置づけられる道練の『安楽集』による文、ことに「問曰。一切衆生皆有仏性、遠劫以来応値多仏。何因至今、仍自輪回生死不出火宅。」という問いは、法然における教相判釈を考えていく上で我々が看過してはなら

ない視点であると思わなければならないと筆者には思われるし、さらに『興福寺奏状』が指摘する「新宗」の三条件のうち、「勅許」を無化する形での論を法然が『選択集』第一章に進めていくことにも関わって、著者が「曖昧さ」を見る道綽の釈文から『選択集』が展開されるという点に、かえって我々が窺わなければならない問題があるのではないだろうか。

著者は、『選択集』第三章（本願章）に「難易の義」として示される、「弥陀如来、法藏比丘之昔、被催平等慈悲、普為撰於一切、不造像起塔等諸行、為往生本願、唯以称名念仏一行、為其本願也。」という、何故称名念仏であるのかという問いに対する結論について、それは、

弥陀の選択を一行に限るといふ制限を付ければ確かに成り立つかもしれないが、全能に近い救済力を持つ弥陀であれば、諸行も念仏も合わせて本願とすることができたはずである。事実、弥陀の四十八願のうち、第十九、第二十願は明らかに諸行の往生を認めている。あえてそれらを無視して念仏一行に限ったところには、法然自身の体験とともに、愚癡無智貧窮の者に自らの立場を置く強い社会意識があったものと考えられる。（一七三頁）

と述べている。しかし、法然における教判の眼目とは、諸行があるにもかかわらず何故念仏一行であるのかという意識に立つことを自明とする仏教観に対して、むしろ、諸行があるにもかかわらず何故衆生は「何因至今、仍自輪回生死不出火宅」という事実を現成し続けるのか、と問うところにあったのではない

だろうか。

教判とは、著者の述べられるように、

教判とは仏教の諸説に価値評価の序列を付け、自らの依る説が仏教の中でもっとも優れたものであることを証明する理論である。（一六四頁）

ということである。しかし、その証明の理論が求められる根底にあることは、教判の理論を構築しようとする者における、「仏教とはたして何であるのか」という問いであろう。法然が独自の教判を位置づけていく『選択集』第一章において、何よりもまずその章の特徴として指摘しなければならないのは、『安楽集』の問いをそのまま借りる形で、その「仏教とは何か」という問題から教判が展開されていくという点である。法然における「浄土宗」の教判とは、この「一切衆生にとつて仏教とは何か」という仏教観を鮮明にしようとする問いのもとに立てられたものである。それゆえに、その法然における教判とは、第一章の劈頭に、「道綽禪師、立聖道・浄土二門、而捨聖道正帰浄土之文」と掲げられるように、「仏教とは何か」ということを問う者において、「捨てて・帰す」という廃立の具体相が実現することをもって、その問いに対する十全な答を明らかにしようとするものであるという点に、他の教判とは一線を画して、同列化することを許さないものがあったのではないだろうか。

著者は「難易の義」に提示される法然の主張を、「法然自身の体験とともに、愚癡無智貧窮の者に自らの立場に置く強い社

会意識」（一七三頁）という点に帰結し、さらに結章「仏教の民衆化」第二節「法然、親鸞の民衆観」（四〇七頁）においても繰り返しその見解を表明されている。しかし、この法然の主張は、法然の「浄土宗」という仏教観に深く関わる問題として考えていくべきことであるように思われるし、著者が法然の「浄土宗」の開宗の意義について、

奈良・平安仏教の八宗の時までは、英語で *synod* と訳されるように、学派的な性格を強く持っていた。それが *synod* としての性格を持つようになるのは、まさに法然の浄土宗に始まると言ってよい。その点でも、法然における開宗は仏教史を画する大きな意味を持つのである。（一六七頁）

と述べておられることも深く関わって、「八宗」「浄土宗」という、それぞれの「宗」のあり方と、その「宗」の成立を根拠づける「学」のあり方とその内容という視野から、仏教という思想のあり方において、衆生がどう捉えられ、どう位置づけられてきたのかということについての研究が、法然の「浄土宗」を問う者全体に対する課題として提起されてくるように思われる。

法然による「浄土宗」という一宗の開示とは、何よりも仏教それ自体に、仏教とは一切衆生にとつてはたして何であるのかという問題を突きつけるものであった。言い換えれば、仏教者における根元的な事柄であり、かつ決して自明としてはならない仏教観そのものが、白日に曝される態でそこに問われたとい

うことである。法然による「浄土宗」の開示とは、仏教の本質を根底から問うところに明らかにされたものであるがゆえに、その法然の仏教観を問ひ直す営みとは、法然に対して信順・疑謗のいずれの立場に立とうとする者にあつても、その者自身の仏教観の本質と決定的に関わる問題として問われなければならない。その意味で、現代において法然を問おうとする営みは、我々自身の仏教観が問われる、という課題としてあることだと言えよう。

この「鎌倉仏教形成論」を読み進めていく中で、筆者に終始自問自答されたことは、自らはどこに立って仏教を問ひ、仏教に何を問おうとしているのかということであつた。それは何よりも、本書の「はじめに」に明らかのように、著者が自らの研究の方法論とその目的とするところを、著者の仏教観に関わつて明確にされたところから本書が成つていることによるものである。そのことからすれば、筆者が記したことは、著者の論考の主旨に対しての得ない言辭を連ねたということにもなるが、本書は単に「鎌倉仏教」考察についての視点を提起するだけにとどまらず、かえつてその研究に関わろうとする者に対して、その立場と方法論との確認を突きつける書でもあると言えよう。著者の研究の姿勢は、既刊の『日本仏教思想史論考』（大蔵出版）にも明確にされているところであり、我々が自らの仏教の「学」のありようをも問うという点で、本書と併せて読むべき書であると言える。